

CHAPTER 29

「行こう、ハリー……」
「いやだ」
「ずっとここにいるわけにはいかねえ。ハリー……さあ、行こう……」
「いやだ」
ハリーはダンブルドアのそばを離れたくなかった。
どこにも行きたくなかった。ハリーの肩でハグリッドの手が震えていた。
そのとき別の声が言った。
「ハリー、行きましょう」
もっと小さくて、もっと暖かい手が、ハリーの手を包み、引き上げた。
ハリーはほとんど何も考えずに、引かれるままにその手に従った。
人混みの中を、無意識に歩きながら、漂ってくる花のような香りで、自分の手を引いて城に向かっているのがジニーだと、ハリーは初めて気がついた。
言葉にならない声々がハリーの心を打ちのめし、すすり泣きや泣き叫ぶ声が夜を突き刺した。
ジニーとハリーはただ歩き続け、玄関ホールに入る階段を上った。
ハリーの目の端に、人々の顔がぼんやりと見えた。
ハリーを見つめ、囁き、訝っている。二人が大理石の階段に向かうと、床に転がっているグリフィンボールのルビーが、滴った血のように光った。
「医務室に行くのよ」ジニーが言った。
「怪我はしてない」ハリーが言った。
「マクゴナガルの命令よ」ジニーが言った。
「みんなもそこにいるわ。ロンもハーマイオニーも、ルーピンも、みんなー」
恐怖が再びハリーの胸を掻き乱した。
置き去りにしてきた、ぐったりと動かない何人かのことを忘れていた。
「ジニー、ほかに誰が死んだの？」
「心配しないで。わたしたちは大丈夫」
「でも、『闇の印』がーマルフォイが誰かの死体を跨いだと言ったー」
「ビルを跨いだのよ。だけど、大丈夫。生き

Chapter 29

The Phoenix Lament

“C’mere, Harry ...”

“No.”

“Yeh can’ stay here, Harry. ... Come on, now. ...”

“No.”

He did not want to leave Dumbledore’s side, he did not want to move anywhere. Hagrid’s hand on his shoulder was trembling. Then another voice said, “Harry, come on.”

A much smaller and warmer hand had enclosed his and was pulling him upward. He obeyed its pressure without really thinking about it. Only as he walked blindly back through the crowd did he realize, from a trace of flowery scent on the air, that it was Ginny who was leading him back into the castle. Incomprehensible voices battered him, sobs and shouts and wails stabbed the night, but Harry and Ginny walked on, back up the steps into the entrance hall. Faces swam on the edges of Harry’s vision, people were peering at him, whispering, wondering, and Gryffindor rubies glistened on the floor like drops of blood as they made their way toward the marble staircase.

“We’re going to the hospital wing,” said Ginny.

“I’m not hurt,” said Harry.

“It’s McGonagall’s orders,” said Ginny. “Everyone’s up there, Ron and Hermione and Lupin and everyone —”

Fear stirred in Harry’s chest again: He had

てるわ」

しかし、ジニーの声のどこかに、ハリーは不吉なものを感じ取った。

「ほんとに？」

「もちろん本当よ……ビルは、ちょっと——ちょっと面倒なことになっただけ。グレイバックに襲われたの。マダム ポンフリーは、ビルがいままでと同じ顔じゃなくなるだろうって……」ジニーの声が少し震えた。

「どんな後遺症があるか、はっきりとはわからないの——つまり、グレイバックは狼人間だし、でも、襲ったときは変身していなかったから」

「でも、ほかのみんなは……ほかにも死体が転がっていた……」

「ネビルが入院しているけど、マダム ポンフリーは、完全に回復するだろうって。それからフリットウィック先生がノックアウトされたけど、でも大丈夫。ちょっとクラクラしているだけ。レイブンクロー生の様子を見にいくつて、言い張っていたわ。それに、『死喰い人』が一人死んだけど、大きなブロンドのやつが、あたりかまわず発射していた『死の呪文』に当たったの——ハリー、あなたのフェリックス薬を飲んでいなかったら、わたしたち全員死んでいたと思うわ。でも、全部すれすれに逸れていったみたい——」

病棟に着いて扉を押し開くと、ネビルが扉近くのベッドに横になっているのが目に入った。

眠っているのだろう。

ロン、ハーマイオニー、ルーナ、トンクス、ルーピンが、病棟のいちばん奥にあるもう一つのベッドを囲んでいた。

扉が開く音で、みんないっせいに顔を上げた。

ハーマイオニーが駆け寄って、ハリーを抱きしめた。

温かかった。やはりハーマイオニーに託して良かった。きっと最良の選択をしてくれたに違いない。

ルーピンも心配そうな顔で近寄ってきた。

「ハリー、大丈夫か？」

「僕は大丈夫……ビルはどうですか？」

誰も答えなかった。

forgotten the inert figures he had left behind.

“Ginny, who else is dead?”

“Don’t worry, none of us.”

“But the Dark Mark — Malfoy said he stepped over a body —”

“He stepped over Bill, but it’s all right, he’s alive.”

There was something in her voice, however, that Harry knew boded ill.

“Are you sure?”

“Of course I’m sure ... he’s a — a bit of a mess, that’s all. Greyback attacked him. Madam Pomfrey says he won’t — won’t look the same anymore. ...”

Ginny’s voice trembled a little.

“We don’t really know what the aftereffects will be — I mean, Greyback being a werewolf, but not transformed at the time.”

“But the others ... There were other bodies on the ground. ...”

“Neville and Professor Flitwick are both hurt, but Madam Pomfrey says they’ll be all right. And a Death Eater’s dead, he got hit by a Killing Curse that huge blond one was firing off everywhere — Harry, if we hadn’t had your Felix potion, I think we’d all have been killed, but everything seemed to just miss us —”

They had reached the hospital wing. Pushing open the doors, Harry saw Neville lying, apparently asleep, in a bed near the door. Ron, Hermione, Luna, Tonks, and Lupin were gathered around another bed near the far end of the ward. At the sound of the doors opening, they all looked up. Hermione ran to Harry and hugged him; Lupin moved forward too,

ハーマイオニーの背中越しにベッドを見ると、ビルが寝ているはずの枕の上に、見知らぬ顔があった。

ひどく切り裂かれて不気味な顔だった。

マダム ポンプリーが、きつい臭いのする緑色の軟膏を傷口に塗りつけていた。

マルフォイのセクタムセンプラの傷を、スネイプが杖でやすやすと治したことを、ハリーは思い出した。

「呪文か何かで、傷を治せないんですか？」ハリーが校医に聞いた。

「この傷にはどんな呪文も効きません」マダム ポンプリーが言った。

「知っている呪文は全部試してみましたが、狼人間の噛み傷には治療法がありません」

「だけど、満月のときに噛まれたわけじゃない」

ロンが、見つめる念力でなんとか治そうとしているかのように、兄の顔をじっと見ながら言った。

「グレイバックは変身してなかった。だから、ビルは絶対には——本物の——？」

ロンが戸惑いがちにルーピンを見た。

「ああ、ビルは本物の狼人間にはならないと思うよ」ルーピンが言った。

「しかし、まったく汚染されないということではない。呪いのかかった傷なんだ。完全には治らないだろう。そして——そしてビルはこれから、何らかの、狼的な特徴を持つことになるだろう」

「でも、ダンブルドアなら、何かうまいやり方を知ってるかもしれない」ロンが言った。

「ダンブルドアはどこだい？ ビルはダンブルドアの命令で、あの狂ったやつらと戦ったんだ。ダンブルドアはビルに借りがある。ビルをこんな状態で放ってほおけないはずだ」

「ロン——ダンブルドアは死んだわ」ジニーが言った。

「まさか！」

ハリーが否定してくれることを望むかのように、ルーピンの目がジニーからハリーへと激しく移動した。

しかしハリーが否定しないことがわかると、ビルのベッド脇の椅子にがっくりと座り込み、両手で顔を覆った。

looking anxious.

“Are you all right, Harry?”

“I’m fine. ... How’s Bill?”

Nobody answered. Harry looked over Hermione’s shoulder and saw an unrecognizable face lying on Bill’s pillow, so badly slashed and ripped that he looked grotesque. Madam Pomfrey was dabbing at his wounds with some harsh-smelling green ointment. Harry remembered how Snape had mended Malfoy’s *Sectumsempra* wounds so easily with his wand.

“Can’t you fix them with a charm or something?” he asked the matron.

“No charm will work on these,” said Madam Pomfrey. “I’ve tried everything I know, but there is no cure for werewolf bites.”

“But he wasn’t bitten at the full moon,” said Ron, who was gazing down into his brother’s face as though he could somehow force him to mend just by staring. “Greyback hadn’t transformed, so surely Bill won’t be a — a real — ?”

He looked uncertainly at Lupin.

“No, I don’t think that Bill will be a true werewolf,” said Lupin, “but that does not mean that there won’t be some contamination. Those are cursed wounds. They are unlikely ever to heal fully, and — and Bill might have some wolfish characteristics from now on.”

“Dumbledore might know something that’d work, though,” Ron said. “Where is he? Bill fought those maniacs on Dumbledore’s orders, Dumbledore owes him, he can’t leave him in this state —”

“Ron — Dumbledore’s dead,” said Ginny.

ハリーはルーピンが取り乱すのを初めて見た。
見てはいけない個人の傷を見てしまったような気がして、ハリーはルーピンから目を逸らし、ロンを見た。
黙ってロンと目を見交わすことで、ハリーは、ジニーの言葉のとおりだと伝えた。
「どんなふうにお亡くなりになったの？」トンクスが小声で聞いた。
「どうしてそうなったの？」
「スネイプが殺した」ハリーが言った。
「僕はその場にいた。僕は見たんだ。僕たちは、『闇の印』が上がっていたので、天文台の塔に戻った……ダンブルドアは病気で、弱っていた。でも、階段を駆け上がってくる足音を聞いたとき、ダンブルドアはそれが罠だとわかったんだと思う。ダンブルドアは僕を金縛りにしたんだ。僕は何にもできなかった。『透明マント』をかぶっていたんだ——そしたらマルフォイが扉から現れて、ダンブルドアを『武装解除』した——」
ハーマイオニーが両手で口を覆った。
ロンはうめき、ルーナの唇が震えた。
「——次々に『死喰い人』がやって来た——そして、スネイプが——それで、スネイプがやった。『アバダ ケダブラ』を」ハリーはそれ以上続けられなかった。
マダム ポンフリーがワッと泣き出した。
誰も校医のボンフリーに気を取られなかったが、ジニーだけがそっと言った。
「シーッ！ 黙って聞いて！」
マダム ポンフリーは嚔咽を呑み込み、指を口に押し当ててこらえながら、目を見開いた。
暗闇のどこかで、不死鳥が鳴いていた。
ハリーが初めて聞く、恐ろしいまでに美しい、打ちひしがれた嘆きの歌だった。
そしてハリーは、以前に不死鳥の歌を聞いて感じたと同じように、その調べを自分の外ではなく、内側に感じた。
ハリー自身の嘆きが不思議にも歌になり、校庭を横切り、城の窓を貫いて響き渡っていた。
全員がその場に仔んで、歌に聞き入った。
どのくらいの時間が経ったのだろう。

“No!” Lupin looked wildly from Ginny to Harry, as though hoping the latter might contradict her, but when Harry did not, Lupin collapsed into a chair beside Bill’s bed, his hands over his face. Harry had never seen Lupin lose control before; he felt as though he was intruding upon something private, indecent. He turned away and caught Ron’s eye instead, exchanging in silence a look that confirmed what Ginny had said.

“How did he die?” whispered Tonks. “How did it happen?”

“Snape killed him,” said Harry. “I was there, I saw it. We arrived back on the Astronomy Tower because that’s where the Mark was. ... Dumbledore was ill, he was weak, but I think he realized it was a trap when we heard footsteps running up the stairs. He immobilized me, I couldn’t do anything, I was under the Invisibility Cloak — and then Malfoy came through the door and disarmed him —”

Hermione clapped her hands to her mouth and Ron groaned. Luna’s mouth trembled.

“— more Death Eaters arrived — and then Snape — and Snape did it. The *Avada Kedavra*.” Harry couldn’t go on.

Madam Pomfrey burst into tears. Nobody paid her any attention except Ginny, who whispered, “Shh! Listen!”

Gulping, Madam Pomfrey pressed her fingers to her mouth, her eyes wide. Somewhere out in the darkness, a phoenix was singing in a way Harry had never heard before: a stricken lament of terrible beauty. And Harry felt, as he had felt about phoenix song before, that the music was inside him, not without: It

ハリーにはわからなかった。
自分たちの追悼の心を映した歌を聞くことで、痛みが少し和らいでいくのはなぜなのかもわからなかった。
しかし、病棟の扉が再び開いたときには、ずいぶん長い時間が経ったような気がした。
マクゴナガル先生が入ってきた。
みんなと同じように、マクゴナガル先生にも戦いの痕が残り、顔がすりむけ、ローブは破れていた。
「モリーとアーサーがここへ来ます」
その声で音楽の魔力が破られた。
全員が夢から醒めたように、再びビルを振り返ったり、目をこすったり、首を振ったりした。
「ハリー、何が起こったのですか？ ハグリッドが言うには、あなたが、ちょうど—ちょうどそのことが起こったとき、ダンブルドア校長と一緒にだったということです。ハグリッドの話では、スネイプ先生が何かに関わって—」
「スネイプが、ダンブルドアを殺しました」
ハリーが言った。
一瞬ハリーを見つめたあと、マクゴナガル先生の体がグラリと揺れた。
すでに立ち直っていたマダム ポンフリーが走り出て、どこからともなく椅子を取り出し、マクゴナガルの体の下に押し込んだ。
「スネイプ」
椅子に腰を落としながら、マクゴナガル先生が弱々しく繰り返した。
「私たち全員が怪しんでいました……しかし、ダンブルドアは信じていた……いつも……スネイプが……信じられません……」
「スネイプは熟達した閉心術士だ」
ルーピンが似つかわしくない乱暴な声で言った。
「そのことはずっとわかっていた」
「しかしダンブルドアは、スネイプは誓ってわたしたちの味方だと言ったわ！」
トンクスが小声で言った。
「わたしたちの知らないスネイプの何かを、ダンブルドアは知っているに違いないって、わたしはいつもそう思っていた……」
「スネイプを信用するに足る鉄壁の理由があ

was his own grief turned magically to song that echoed across the grounds and through the castle windows.

How long they all stood there, listening, he did not know, nor why it seemed to ease their pain a little to listen to the sound of their mourning, but it felt like a long time later that the hospital door opened again and Professor McGonagall entered the ward. Like all the rest, she bore marks of the recent battle: There were grazes on her face and her robes were ripped.

“Molly and Arthur are on their way,” she said, and the spell of the music was broken: Everyone roused themselves as though coming out of trances, turning again to look at Bill, or else to rub their own eyes, shake their heads. “Harry, what happened? According to Hagrid you were with Professor Dumbledore when he — when it happened. He says Professor Snape was involved in some —”

“Snape killed Dumbledore,” said Harry.

She stared at him for a moment, then swayed alarmingly; Madam Pomfrey, who seemed to have pulled herself together, ran forward, conjuring a chair from thin air, which she pushed under McGonagall.

“Snape,” repeated McGonagall faintly, falling into the chair. “We all wondered ... but he trusted ... always ... *Snape* ... I can’t believe it. ...”

“Snape was a highly accomplished Occlumens,” said Lupin, his voice uncharacteristically harsh. “We always knew that.”

“But Dumbledore swore he was on our side!” whispered Tonks. “I always thought Dumbledore must know something about

ると、ダンブルドアは常々そう仄めかしていました」

マクゴナガルは、タータンの縁取りのハンカチを目頭に当て、溢れる涙を押えながら呟いた。

「もちろん……スネイプは、過去が過去ですから……当然みんなが疑いました……しかしダンブルドアが私にはっきりと、スネイプの悔恨は絶対に本物だとおっしゃいました……スネイプを疑う言葉は、一言も聞こうとなさらなかった！」

「ダンブルドアを信用させるのに、スネイプが何を話したのか、知りたいものだわ」トンクスが言った。

「僕は知ってる」ハリーが言った。
全員が振り返ってハリーを見つめた。

「スネイプがヴォルデモートに流した情報のおかげで、ヴォルデモートは僕の父さんと母さんを追い詰めたんだ。そしてスネイプはダンブルドアに、自分は何をしたのかわかっていなかった、自分がやったことを心から後悔している、二人が死んだことを申しわけなく思っているって、そう言ったんだ」

「それで、ダンブルドアはそれを信じたのか？」ルーピンが信じられないという声で言った。

「ダンブルドアは、スネイプがジェームズの死をすまなく思っていると言うのを信じた？ スネイプはジェームズを憎んでいたのに……」

「それにスネイプは、僕の母さんのことも、これっぽっちも価値があるなんて思っちゃいなかった」ハリーが言った。

だって、母さんはマグル生まれだ……『穢れた血』って、スネイプは母さんのことをそう呼んだ……」

ハリーがどうしてそんなことを知っているのか、誰も尋ねなかった。

全員が恐ろしい衝撃を受け、すでに起きてしまった途方もない現実を消化しきれずに、呆然としているようだった。

「全部私の責任です」

突然マクゴナガル先生が言った。濡れたハンカチを両手でねじりながら、マクゴナガル先生は混乱した表情だった。

Snape that we didn't. ...”

“He always hinted that he had an ironclad reason for trusting Snape,” muttered Professor McGonagall, now dabbing at the corners of her leaking eyes with a tartan-edged handkerchief. “I mean ... with Snape’s history ... of course people were bound to wonder ... but Dumbledore told me explicitly that Snape’s repentance was absolutely genuine. ... Wouldn’t hear a word against him!”

“I’d love to know what Snape told him to convince him,” said Tonks.

“I know,” said Harry, and they all turned to look at him. “Snape passed Voldemort the information that made Voldemort hunt down my mum and dad. Then Snape told Dumbledore he hadn’t realized what he was doing, he was really sorry he’d done it, sorry that they were dead.”

They all stared at him.

“And Dumbledore believed that?” said Lupin incredulously. “Dumbledore believed Snape was sorry James was dead? Snape *hated* James. ...”

“And he didn’t think my mother was worth a damn either,” said Harry, “because she was Muggle-born. ... ‘Mudblood,’ he called her. ...”

Nobody asked how Harry knew this. All of them seemed to be lost in horrified shock, trying to digest the monstrous truth of what had happened.

“This is all my fault,” said Professor McGonagall suddenly. She looked disoriented, twisting her wet handkerchief in her hands. “My fault. I sent Filius to fetch Snape tonight, I actually sent for him to come and help us! If I

「私が悪いのです。今夜、フィリウスにスネイプを迎えにいかせました。応援に来てくれるようにと、私がスネイプを迎えにいかせたのです！危険な事態を知らせなければ、スネイプが『死喰い人』に加勢することもなかったでしょうに。フィリウスの知らせを受けるまでは、スネイプは、『死喰い人』があの場合に来ているとは知らなかったと思います。そういう予定だとは知らなかったと思います」

「あなたの責任ではない、ミネルバ」ルーピンがきっぱりと言った。

「我々全員が、もっと援軍がほしかった。スネイプが駆けつけてくると思って、みんな喜んだ」

「それじゃ、戦いの場に着いたとき、スネイプは『死喰い人』の味方についたんですか？」

ハリーは、スネイプの二枚舌も破廉恥な行為も、残らず詳しく知りたかった。スネイプを憎み、復讐を誓う理由をもっと集めたいと熱くなった。

「何が起こったのか、私にははっきりわかりません」マクゴナガル先生は、気持ちが乱れているようだった。

「わからないことだらけです……ダンブルドアは、数時間学校を離れるから念のため廊下の巡回をするようにとおっしゃいました……リーマス、ビル、ニンファドローを呼ぶようにと……そしてみんなで巡回しました。まったく静かなものでした。校外に通じる秘密の抜け道は、全部警備されていましたし、誰も空から侵入できないこともわかっていました。城に入るすべての入口には強力な魔法がかけられていました。いったい『死喰い人』がどうやって侵入したのか、私にはいまだにわかりません……」

「僕は知っています」

ハリーが言った。

そして「姿をくまますキャビネット棚」が対になっていること、魔法の通路が二つの棚を結ぶことを簡単に説明した。

「それで連中は、『必要の部屋』から入り込んだんです」

そんなつもりはなかったのに、ハリーは、ロ

hadn't alerted Snape to what was going on, he might never have joined forces with the Death Eaters. I don't think he knew they were there before Filius told him, I don't think he knew they were coming.”

“It isn't your fault, Minerva,” said Lupin firmly. “We all wanted more help, we were glad to think Snape was on his way. ...”

“So when he arrived at the fight, he joined in on the Death Eaters' side?” asked Harry, who wanted every detail of Snape's duplicity and infamy, feverishly collecting more reasons to hate him, to swear vengeance.

“I don't know exactly how it happened,” said Professor McGonagall distractedly. “It's all so confusing. ... Dumbledore had told us that he would be leaving the school for a few hours and that we were to patrol the corridors just in case ... Remus, Bill, and Nymphadora were to join us ... and so we patrolled. All seemed quiet. Every secret passageway out of the school was covered. We knew nobody could fly in. There were powerful enchantments on every entrance into the castle. I still don't know how the Death Eaters can possibly have entered. ...”

“I do,” said Harry, and he explained, briefly, about the pair of Vanishing Cabinets and the magical pathway they formed. “So they got in through the Room of Requirement.”

Almost against his will he glanced from Ron to Hermione, both of whom looked devastated.

“I messed up, Harry,” said Ron bleakly. “We did like you told us: We checked the Marauder's Map and we couldn't see Malfoy on it, so we thought he must be in the Room of

ンとハーマイオニーをちらりと見た。
二人とも打ちのめされたような顔だった。
「ハリー、僕、しくじった」ロンが沈んだ声で言った。
「僕たち、君に言われたとおりにしたんだ。
『忍びの地図』を調べたら、マルフォイが地図で見つからなかったから、『必要の部屋』に違いないと思って、僕とジニーとネビルが見張りにいったんだ……だけど、マルフォイに出し抜かれた」
「見張りを始めてから一時間ぐらいで、マルフォイがそこから出てきたの」ジニーが言った。
「一人で、あの気持ちの悪い萎びた手を持って——」
「あの『輝きの手』だ」ロンが言った。
「ほら、持っている者だけに明かりが見えるってやつだ。憶えてるか？」
「とにかく」ジニーが続けた。
「マルフォイは、『死喰い人』を外に出しても安全かどうかを偵察に出てきたに違いないわ。
だって、わたしたちを見たたん、何かを空中に投げて、そしたらあたりがまっ暗になって——」
「——ペルー製の『インスタント煙幕』だ」ロンが苦々しく言った。
「フレッドとジョージの。相手を見て物を売って、あいつらに一言、言ってやらなきゃ」
「わたしたち、何もかも全部やってみたわ——ルーモス、インセンディオ」ジニーが言った。
「何をやっても暗闇を破れなかった。廊下から手探りで抜け出すことしかできなかったわ。その間に、誰かが急いでそばを通り過ぎる音がした。当然マルフォイは、あの『手』のおかげで見えたから、連中を誘導してたんだわ。でもわたしたちは、仲間に当たるかもしれないと思うと、呪文も何も使えやなかった。明るい廊下に出たときには、連中はもういなかった」
「幸いなことに」ルーピンがシワガレ声で言った。
「ロン、ジニー、ネビルは、それからすぐあ

Requirement, so me, Ginny, and Neville went to keep watch on it ... but Malfoy got past us.”

“He came out of the room about an hour after we started keeping watch,” said Ginny. “He was on his own, clutching that awful shriveled arm —”

“His Hand of Glory,” said Ron. “Gives light only to the holder, remember?”

“Anyway,” Ginny went on, “he must have been checking whether the coast was clear to let the Death Eaters out, because the moment he saw us he threw something into the air and it all went pitch-black —”

“— Peruvian Instant Darkness Powder,” said Ron bitterly. “Fred and George’s. I’m going to be having a word with them about who they let buy their products.”

“We tried everything, Lumos, Incendio,” said Ginny. “Nothing would penetrate the darkness; all we could do was grope our way out of the corridor again, and meanwhile we could hear people rushing past us. Obviously Malfoy could see because of that hand thing and was guiding them, but we didn’t dare use any curses or anything in case we hit each other, and by the time we’d reached a corridor that was light, they’d gone.”

“Luckily,” said Lupin hoarsely, “Ron, Ginny, and Neville ran into us almost immediately and told us what had happened. We found the Death Eaters minutes later, heading in the direction of the Astronomy Tower. Malfoy obviously hadn’t expected more people to be on the watch; he seemed to have exhausted his supply of Darkness Powder, at any rate. A fight broke out, they scattered and we gave chase. One of them,

とに我々と出会って、何があったかを話してくれた。数分後に我々は、天文台の塔に向かって『死喰い人』を見つけた。マルフォイは、ほかにも見張りの者がいるとは、まったく予想していなかったらしい。いずれにせよ『インスタント煙幕』は尽きていたらしい。戦いが始まり、連中は散らばって、我々が追った。ギボンが一人抜け出して、塔に上る階段に向かった——

「『闇の印』を打ち上げるため？」ハリーが聞いた。

「ギボンが打ち上げたに違いない。そうだ。連中は『必要の部屋』を出る前に、示し合わせたに違いない」ルーピンが言った。

「しかしギボンは、そのままとどまって、一人でダンブルドアを待ち受ける気にはならなかったのだろう。階下に駆け戻って、また戦いに加わったのだから。そして、私をわずかに逸れた『死の呪い』に当たった」

「それじゃ、ロンは、ジニーとネビルと一緒に『必要の部屋』を見張っていた」ハリーはハーマイオニーのほうを向いた。

「君は——？」

「スネイプの部屋の前、そうよ」

ハーマイオニーは目に涙を光らせながら、小声で言った。

「ルーナと一緒に。ずいぶん長いことそこにいたんだけど、何も起こらなかった……上のほうで何が起こっているのかわからなかったの。ロンが『忍びの地図』を持っていたし……フリットウィック先生が地下牢に走ってきたのは、もう真夜中近くだった。『死喰い人』が城の中にいるって、叫んでいたわ。私とルーナがそこにいることには、全然気がつかなかったのじゃないかと思う。まっすぐにスネイプの部屋に飛び込んで、スネイプに自分と一緒に来て加勢してくれと言っているのが聞こえたわ。それからドサッという大きな音がして、スネイプが部屋から飛び出してきたの。そして私たちのことを見て——そして——」

「どうしたんだ？」ハリーは先を促した。

「私、バカだったわ、ハリー！」

ハーマイオニーが上ずった声で囁くように言った。

Gibbon, broke away and headed up the tower stairs ——”

“To set off the Mark?” asked Harry.

“He must have done, yes, they must have arranged that before they left the Room of Requirement,” said Lupin. “But I don’t think Gibbon liked the idea of waiting up there alone for Dumbledore, because he came running back downstairs to rejoin the fight and was hit by a Killing Curse that just missed me.”

“So if Ron was watching the Room of Requirement with Ginny and Neville,” said Harry, turning to Hermione, “were you ——?”

“Outside Snape’s office, yes,” whispered Hermione, her eyes sparkling with tears, “with Luna. We hung around for ages outside it and nothing happened. ... We didn’t know what was going on upstairs, Ron had taken the map. ... It was nearly midnight when Professor Flitwick came sprinting down into the dungeons. He was shouting about Death Eaters in the castle, I don’t think he really registered that Luna and I were there at all, he just burst his way into Snape’s office and we heard him saying that Snape had to go back with him and help and then we heard a loud thump and Snape came hurtling out of his room and he saw us and —— and ——”

“What?” Harry urged her.

“I was so stupid, Harry!” said Hermione in a high-pitched whisper. “He said Professor Flitwick had collapsed and that we should go and take care of him while he —— while he went to help fight the Death Eaters ——” She covered her face in shame and continued to talk into her fingers, so that her voice was muffled. “We went into his office to see if we could help

「スネイプは、フリットウィック先生が気絶したから、私たちが面倒を看なさいって言った。そして自分は——自分は『死喰い人』との戦いの加勢に行くからって——」

ハーマイオニーは恥じて顔を覆い、指の間から話し続けたので声がくぐもっていた。

「私たち、フリットウィック先生を助けようとして、スネイプの部屋に入ったの。そしたら、先生が気を失って床に倒れていて……ああ、いまならはっきりわかるわ。スネイプがフリットウィックに『失神呪文』をかけたのよ。でも気がつかなかった。ハリー、私たち、気がつかなかったの。スネイプを、みすみす行かせてしまった！」

「君の責任じゃない」ルーピンがきっぱりと言った。

「ハーマイオニー、スネイプの言うことに従わなかったら、邪魔をしたりしたら、あいつはおそらく君もルーナも殺していただろう」

「それで、スネイプは上階に来た」ハリーは頭の中で、スネイプの動きを追っていた。

スネイプはいつものように黒いローブをなびかせ、大理有の階段を駆け上がりながらマントの下から杖を取り出す。

「そして、みんなが戦っている場所を見つけた……」

「わたしたちは苦戦していて、形勢不利だった」トンクスが低い声で言った。

「ギボンは死んだけれど、ほかの『死喰い人』は、死ぬまで戦う覚悟のようだった。ネビルが傷つき、ビルはグレイバックに噛みつかれた……まっ暗だった……呪いがそこら中に飛び交って……マルフォイが姿を消した。すり抜けて塔への階段を上ったに違いない……ほかの『死喰い人』も、マルフォイのあとから次々階段を駆け上がった。そのうちの一人が何らかの呪文を使って、上ったあとの階段に障壁を作った……ネビルが突進して、空中に投げられた——」

「僕たち、誰も突破できなかった」ロンが言った。

「それに、あのでっかい『死喰い人』のやつが、相変わらず、あたりかまわず呪詛を飛ばしていて、それがあちこちの壁に損ね返ってきたけど、きわどいところで僕たちには当た

Professor Flitwick and found him unconscious on the floor ... and oh, it's so obvious now, Snape must have Stupefied Flitwick, but we didn't realize, Harry, we didn't realize, we just let Snape go!”

“It's not your fault,” said Lupin firmly. “Hermione, had you not obeyed Snape and got out of the way, he probably would have killed you and Luna.”

“So then he came upstairs,” said Harry, who was watching Snape running up the marble staircase in his mind's eye, his black robes billowing behind him as ever, pulling his wand from under his cloak as he ascended, “and he found the place where you were all fighting. ...”

“We were in trouble, we were losing,” said Tonks in a low voice. “Gibbon was down, but the rest of the Death Eaters seemed ready to fight to the death. Neville had been hurt, Bill had been savaged by Greyback ... It was all dark ... curses flying everywhere ... The Malfoy boy had vanished, he must have slipped past, up the stairs ... then more of them ran after him, but one of them blocked the stair behind them with some kind of curse. ... Neville ran at it and got thrown up into the air —”

“None of us could break through,” said Ron, “and that massive Death Eater was still firing off jinxes all over the place, they were bouncing off the walls and barely missing us. ...”

“And then Snape was there,” said Tonks, “and then he wasn't —”

“I saw him running toward us, but that huge Death Eater's jinx just missed me right

らなかった……」

「そしたらそこにスネイプがいた」トンクスが言った。

「そして、すぐいなくなった——」

「スネイプがこっちに向かってくるところを見たわ。でも、そのすぐあとに、大男の『死喰い人』の呪詛が飛んできて、危うくわたしに当たるところだった。それでわたし、ヒョイとかわしたとたんに、何もかも見失ってしまったの」ジニーが言った。

「私は、あいつが、呪いの障壁などないかのように、まっすぐ突っ込んでいくのを見た」ルーピンが言った。

「私もそのあとに続こうとしたのだが、ネビルと同じように撥ね返されてしまった……」

「スネイプは、私たちの知らない呪文を知っていたに違いありません」

マクゴナガルが呟くように言った。

「なにしろ——スネイプは『闇の魔術に対する防衛術』の先生なのですから……私は、スネイプが、塔に逃げ込んだ『死喰い人』を追いかけるのに急いでいるのだと思っていたのです……」

「追いかけてはいました」ハリーは激怒していた。

「でも阻止するためでなく、加勢するためです……それに、その障壁を通り抜けるには、きっと『闇の印』を持っていないといけないうに違いない——それで、スネイプが下に戻ってきたときは、何があったんですか？」

「ああ、大男の『死喰い人』の呪詛で、天井の半分が落下してきたところだった。おかげで階段の障壁の呪いも破れた」ルーピンが言った。

「我々全員が駆け出した——とにかく、まだ立てる者はそうした——するとスネイプと少年が、埃の中から姿を現した！当然、我々は二人を攻撃しなかった——」

「二人を通してしまったんだ」トンクスが虚ろな声で言った。

「『死喰い人』に追われているのだと思って——そして、気がついたら、ほかの『死喰い人』とグレイバックが戻ってきていて、また戦いが始まった——スネイプが何か叫ぶのを聞いたように思ったけど、何と言っているの

afterward and I ducked and lost track of things,” said Ginny.

“I saw him run straight through the cursed barrier as though it wasn’t there,” said Lupin. “I tried to follow him, but was thrown back just like Neville. ...”

“He must have known a spell we didn’t,” whispered McGonagall. “After all — he was the Defense Against the Dark Arts teacher. ... I just assumed that he was in a hurry to chase after the Death Eaters who’d escaped up to the tower. ...”

“He was,” said Harry savagely, “but to help them, not to stop them ... and I’ll bet you had to have a Dark Mark to get through that barrier — so what happened when he came back down?”

“Well, the big Death Eater had just fired off a hex that caused half the ceiling to fall in, and also broke the curse blocking the stairs,” said Lupin. “We all ran forward — those of us who were still standing anyway — and then Snape and the boy emerged out of the dust — obviously, none of us attacked them —”

“We just let them pass,” said Tonks in a hollow voice. “We thought they were being chased by the Death Eaters — and next thing, the other Death Eaters and Greyback were back and we were fighting again — I thought I heard Snape shout something, but I don’t know what —”

“He shouted, ‘It’s over,’ ” said Harry. “He’d done what he’d meant to do.”

They all fell silent. Fawkes’s lament was still echoing over the dark grounds outside. As the music reverberated upon the air, unbidden, unwelcome thoughts slunk into Harry’s

かわからなかった——」

「あいつは、『終わった』って叫んだ」ハリーが言った。

「やろうとしていたことを、やり遂げただ」

全員が黙り込んだ。フォークスの嘆きが、暗い校庭の上にまだ響き渡っていた。

夜の空気を震わせるその音楽を聞きながら、ハリーの頭に、望みもしない、考えたくもない思いが忍び込んできた……ダンブルドアの亡骸は、もう塔の下から運び出されたのだろうか？ それからどうなるのだろうか？ どこに葬られるのだろうか？ ハリーはポケットの中で拳をギュッと握りしめた。

右手の指の関節に、偽の分霊箱のひんやりとした小さい塊を感じた。

病棟の扉が勢いよく開き、みんなを飛び上がらせた。

ウィーズリー夫妻が急ぎ足で入ってきた。そのすぐ後ろに、美しい顔を恐怖に強張らせたフラーの姿があった。

「モリー——アーサー——」

マクゴナガル先生が飛び上がって、急いで二人を迎えた。

「お気の毒です——」

「ビル」めっちゃめっちゃになったビルの顔を見るなり、ウィーズリー夫人はマクゴナガル先生のそばを走り過ぎ、小声で呼びかけた。

「ああ、ビル！」

ルーピンとトンクスが急いで立ち上がり、身を引いて、ウィーズリー夫妻がベッドに近寄れるようにした。

ウィーズリー夫人は、息子に覆いかぶさり、血だらけの額に口づけした。

「息子はグレイバックに襲われたとおっしゃいましたかね？」

ウィーズリー氏が、気がかりでたまらないようにマクゴナガル先生に聞いた。

「しかし、変身してはいなかったのですね？ すると、どういうことなのでしょう？ ビルはどうなりますか？」

「まだわからないのです」マクゴナガル先生は、助けを求めるようにルーピンを見た。

「アーサー、おそらく、何らかの汚染はあるだろう」ルーピンが言った。

mind. ... Had they taken Dumbledore's body from the foot of the tower yet? What would happen to it next? Where would it rest? He clenched his fists tightly in his pockets. He could feel the small cold lump of the fake Horcrux against the knuckles of his right hand.

The doors of the hospital wing burst open, making them all jump: Mr. and Mrs. Weasley were striding up the ward, Fleur just behind them, her beautiful face terrified.

“Molly — Arthur —” said Professor McGonagall, jumping up and hurrying to greet them. “I am so sorry —”

“Bill,” whispered Mrs. Weasley, darting past Professor McGonagall as she caught sight of Bill's mangled face. “Oh, *Bill!*”

Lupin and Tonks had got up hastily and retreated so that Mr. and Mrs. Weasley could get nearer to the bed. Mrs. Weasley bent over her son and pressed her lips to his bloody forehead.

“You said Greyback attacked him?” Mr. Weasley asked Professor McGonagall distractedly. “But he hadn't transformed? So what does that mean? What will happen to Bill?”

“We don't yet know,” said Professor McGonagall, looking helplessly at Lupin.

“There will probably be some contamination, Arthur,” said Lupin. “It is an odd case, possibly unique. ... We don't know what his behavior might be like when he awakens. ...”

Mrs. Weasley took the nasty-smelling ointment from Madam Pomfrey and began dabbing at Bill's wounds.

「珍しいケースだ。おそらく例がない……ビルが目を覚めたとき、どういう行動に出るかはわからない……」

ウィーズリー夫人は、マダム ボンフリーから嫌な臭いの軟膏を受け取り、ビルの傷に塗りこ込みはじめた。

「そして、ダンブルドアは……」ウィーズリー氏が言った。

「ミネルバ、本当かね……ダンブルドアは本当に……？」

マクゴナガル先生が頷いたとき、ハリーは、ジニーが自分のそばに来たのを感じて、ジニーを見た。

ジニーは少し目を細めて、フラーを凝視していた。

フラーは凍りついたような表情でビルを見下ろしていた。

「ダンブルドアが逝ってしまった」

ウィーズリー氏が呟くように言った。

しかし、ウィーズリー夫人の目は、長男だけを見ていた。

すすり泣きははじめたウィーズリー夫人の涙が、ズタズタになったビルの顔にポトポト落ちた。

「もちろん、どんな顔になったってかまわないわ……そんなことは……どうでもいいことだわ……でもこの子はとってもかわいい、ちっ——ちっちゃな男の子だった……いつでもとってもハンサムだった……それに、もうすぐ結——結婚するはずだったのに！」

「それ、ど——どういう意味で——すか？」突然フラーが大きな声を出した。

「ど——どういう意味で——すか？ このいとが結婚するあ——ずだった？」

ウィーズリー夫人が、驚いたように涙に濡れた顔を上げた。

「でも——ただ——」

「ビルがもう、わたしと結婚したくな——いと思うので——すか？」フラーが問い詰めた。

「こんな噛み傷のせ——いで、このいとがもう、わたしを愛さな——いと思いま——すか？」

「いいえ、そういうことではなくて——」

「だって、このいとは、わたしを愛しま——す！」

フラーはすっと背筋を伸ばし、長い豊かなブ

“And Dumbledore …” said Mr. Weasley. “Minerva, is it true … Is he really … ?”

As Professor McGonagall nodded, Harry felt Ginny move beside him and looked at her. Her slightly narrowed eyes were fixed upon Fleur, who was gazing down at Bill with a frozen expression on her face.

“Dumbledore gone,” whispered Mr. Weasley, but Mrs. Weasley had eyes only for her eldest son; she began to sob, tears falling onto Bill’s mutilated face.

“Of course, it doesn’t matter how he looks. … It’s not r-really important … but he was a very handsome little b-boy … always very handsome … and he was g-going to be married!”

“And what do you mean by zat?” said Fleur suddenly and loudly. “What do you mean, ‘e was *going* to be married?’ ”

Mrs. Weasley raised her tear-stained face, looking startled. “Well — only that —”

“You theenk Bill will not wish to marry me anymore?” demanded Fleur. “You theenk, because of these bites, he will not love me?”

“No, that’s not what I —”

“Because ‘e will!” said Fleur, drawing herself up to her full height and throwing back her long mane of silver hair. “It would take more zan a werewolf to stop Bill loving me!”

“Well, yes, I’m sure,” said Mrs. Weasley, “but I thought perhaps — given how — how he —”

“You thought I would not weesh to marry him? Or per’aps, you hoped?” said Fleur, her nostrils flaring. “What do I care how he looks? I am good-looking enough for both of us, I

ロンドの髪をサッと後ろに払った。
「狼人間なんかが、ビルに、わたしを愛することをやめさせられませーん！」
「まあ、ええ、きっとそうでしょう」ウィーズリー夫人が言った。
「でも、もしかしたらーもうこんなーこの子がこんなー」
「わたしが、このいとと結婚したくなーいだろうと思ったのでーすか？ それとも、もしかして、そうなって欲しいと思いまーしたか？」フラーは鼻の穴を膨らませた。
「このいとがどんな顔でも、わたしが気にしまーすか？ わたしだけで十分ふーたくぶん美しいと思いまーす！ 傷痕は、わたしのアズバンドが勇敢だという印でーす！ それに、それはわたしがやりまーす！」
フラーは激しい口調でそう言うなり、軟膏を奪ってウィーズリー夫人を押しつけた。
ウィーズリー夫人は、夫に倒れ掛かり、フラーがビルの傷を拭うのを、なんとも奇妙な表情で見つめていた。
誰も何も言わなかった。
ハリーは身動きすることさえ遠慮した。
みんなと同じように、ハリーもドカーンと爆発が来る時を待っていた。
「大叔母のミュリエルがー」
長い沈黙のあと、ウィーズリー夫人が口を開いた。
「とても美しいティアラを持っているわーゴブリン製のよーあなたの結婚式に貸していただけるように、大叔母を説得できると恩うわ。大叔母はビルが大好きなの。それにあのティアラは、あなたの髪にとっても似合うと思いますよ」
「ありがとう」フラーが硬い口調で言った。
「それは、きーっと、美しいでしょう」
そしてーハリーには、どうしてそうなったのかよくわからなかったがー二人の女性は抱き合って泣き出した。
何かなんだかまったくわからず、いったい世の中はどうなっているんだろうと訝りながら、ハリーは振り返った。
ロンもハリーと同じ気持ちらしく、ボカンとしていたし、ジニーとハーマイオニーは、呆気に取られて顔を見合わせていた。

theenk! All these scars show is zat my husband is brave! And I shall do zat!” she added fiercely, pushing Mrs. Weasley aside and snatching the ointment from her.

Mrs. Weasley fell back against her husband and watched Fleur mopping up Bill’s wounds with a most curious expression upon her face. Nobody said anything; Harry did not dare move. Like everybody else, he was waiting for the explosion.

“Our Great-Auntie Muriel,” said Mrs. Weasley after a long pause, “has a very beautiful tiara — goblin-made — which I am sure I could persuade her to lend you for the wedding. She is very fond of Bill, you know, and it would look lovely with your hair.”

“Thank you,” said Fleur stiffly. “I am sure zat will be lovely.”

And then, Harry did not quite see how it happened, both women were crying and hugging each other. Completely bewildered, wondering whether the world had gone mad, he turned around: Ron looked as stunned as he felt and Ginny and Hermione were exchanging startled looks.

“You see!” said a strained voice. Tonks was glaring at Lupin. “She still wants to marry him, even though he’s been bitten! She doesn’t care!”

“It’s different,” said Lupin, barely moving his lips and looking suddenly tense. “Bill will not be a full werewolf. The cases are completely —”

“But I don’t care either, I don’t care!” said Tonks, seizing the front of Lupin’s robes and shaking them. “I’ve told you a million times. ...”

「わかったでしょう！」
張り詰めた声がした。
トンクスがルーピンを睨んでいた。
「フラワーはそれでもビルと結婚したいのよ。
噛まれたというのに！ そんなことはどうでもいいのよ！」
「次元が違う」
ルーピンはほとんど唇を動かさず、突然表情が強張っていた。
「ビルは完全な狼人間にはならない。事情がまったくー」
「でも、わたしも気にしないわ。気にしないわ！」
トンクスは、ルーピンのローブの胸元をつかんで揺すぶった。
「百万回も、あなたにそう言ったのに……」
トンクスの守護霊やくすんだ茶色の髪の毛、誰かがグレイバックに襲われたという噂を聞きつけてダンブルドアに会いに駆けつけた理由、ハリーには突然、そのすべてがはつきりわかった。
トンクスが愛したのは、シリウスではなかったのだ……。
「私も、者に百万回も言った」
ルーピンはトンクスの目を避けて、床を見つめながら言った。
「私は君にとって、歳を取りすぎているし、貧乏すぎる……危険すぎる……」
「リーマス、あなたのそういう考え方はばかげているって、私は最初からそう言ってますよ」
ウィーズリー夫人が、抱き合ったフラワーの背中を軽く叩きながら、フラワーの肩越しに言った。
「ばかげてはいない」ルーピンがしっかりした口調で言った。
「トンクスには、誰か若くて健全な人がふさわしい」
「でも、トンクスは君がいいんだ」ウィーズリー氏が、小さく微笑みながら言った。
「それに、結局のところ、リーマス、若くて健全な男が、ずっとそのままだとはかざらんよ」
ウィーズリー氏は、二人の間に横たわっている息子のほうを悲しそうに見た。

And the meaning of Tonks's Patronus and her mouse-colored hair, and the reason she had come running to find Dumbledore when she had heard a rumor someone had been attacked by Greyback, all suddenly became clear to Harry; it had not been Sirius that Tonks had fallen in love with after all.

“And I've told *you* a million times,” said Lupin, refusing to meet her eyes, staring at the floor, “that I am too old for you, too poor ... too dangerous. ...”

“I've said all along you're taking a ridiculous line on this, Remus,” said Mrs. Weasley over Fleur's shoulder as she patted her on the back.

“I am not being ridiculous,” said Lupin steadily. “Tonks deserves somebody young and whole.”

“But she wants you,” said Mr. Weasley, with a small smile. “And after all, Remus, young and whole men do not necessarily remain so.”

He gestured sadly at his son, lying between them.

“This is ... not the moment to discuss it,” said Lupin, avoiding everybody's eyes as he looked around distractedly. “Dumbledore is dead. ...”

“Dumbledore would have been happier than anybody to think that there was a little more love in the world,” said Professor McGonagall curtly, just as the hospital doors opened again and Hagrid walked in.

The little of his face that was not obscured by hair or beard was soaking and swollen; he was shaking with tears, a vast, spotted

「いまは……そんなことを話す時じゃない」
ルーピンは、落ち着かない様子で周りを見回し、みんなの目を避けながら言った。

「ダンブルドアが死んだんだ……」
「世の中に、少し愛が増えたと知ったら、ダンブルドアは誰よりもお喜びになったでしょう」

マクゴナガル先生が素っ気なく言った。
そのとき扉が再び開いて、ハグリッドが入ってきた。髭や髪に埋もれてわずかしか見えない顔が、泣き腫らしてぐしょ濡れだった。巨大な水玉模様のハンカチを握りしめ、ハグリッドは全身を震わせて泣いていた。

「す……すませました、先生」ハグリッドは声を詰まらせた。

「俺が、は——運びました。スプラウト先生は子どもたちをベッドに戻しました。フリットウィック先生は横になっちゃいますが、すーぐよくなるっちゃゅうとります。スラグホーン先生は、魔法省に連絡したと言っちゃいます」

「ありがとう、ハグリッド」
マクゴナガル先生はすぐさま立ち上がり、ピルの周りにいる全員を見た。

「私は、魔法省が到着したときに、お迎えしなければなりません。ハグリッド、寮監の先生方に——スリザリンはスラグホーンが代表すればよいでしょう——直ちに私の事務所に集まるようにと知らせてください。あなたも来てください」

ハグリッドが頷いて向きを変え、重い足取りで部屋を出ていった。そのときマクゴナガル先生がハリーを見下ろして言った。

「寮監たちに会う前に、ハリー、あなたとちょっとお話があります。一緒に来てください……」

ハリーは立ち上がって、ロン、ハーマイオニー、ジニーに「あとでね」と呟くように声をかけ、マクゴナガル先生に従って病棟を出た。

外の廊下は人気もなく、聞こえる音と言えば、遠くの不死鳥の歌声だけだった。

しばらくしてハリーは、マクゴナガル先生の事務所ではなく、ダンブルドアの校長室に向かっていることに気がついた。

handkerchief in his hand.

“I’ve … I’ve done it, Professor,” he choked. “M—moved him. Professor Sprout’s got the kids back in bed. Professor Flitwick’s lyin’ down, but he says he’ll be all righ’ in a jiffy, an’ Professor Slughorn says the Ministry’s bin informed.”

“Thank you, Hagrid,” said Professor McGonagall, standing up at once and turning to look at the group around Bill’s bed. “I shall have to see the Ministry when they get here. Hagrid, please tell the Heads of Houses — Slughorn can represent Slytherin — that I want to see them in my office forthwith. I would like you to join us too.”

As Hagrid nodded, turned, and shuffled out of the room again, she looked down at Harry. “Before I meet them I would like a quick word with you, Harry. If you’ll come with me. …”

Harry stood up, murmured “See you in a bit” to Ron, Hermione, and Ginny, and followed Professor McGonagall back down the ward. The corridors outside were deserted and the only sound was the distant phoenix song. It was several minutes before Harry became aware that they were not heading for Professor McGonagall’s office, but for Dumbledore’s, and another few seconds before he realized that of course, she had been deputy headmistress. … Apparently she was now headmistress … so the room behind the gargoyle was now hers.

In silence they ascended the moving spiral staircase and entered the circular office. He did not know what he had expected: that the room would be draped in black, perhaps, or even that Dumbledore’s body might be lying there. In

一瞬、間を置いて、ハリーはやっと気づいた。

そうだ、マクゴナガル先生は副校長だった…
…当然いまは、校長になったのだ……

ガーゴイルの護る部屋は、いまマクゴナガル先生の部屋だった……。

二人は黙って動く螺旋階段を上り、円形の校長室に入った。

校長室は変わってしまったかもしれないと、ハリーは漠然と考えていた。

もしかしたら黒い幕で覆われているかもしれないし、ダンブルドアの亡骸が横たわっているかもしれない。

しかし、その部屋は、ほんの数時間前、ハリーとダンブルドアが出発したときとほとんど変わっていないように見えた。

銀の小道具類は、華奢な脚のテーブルの上でくるくる回り、ポッポッと煙を上げていたし、グリフィンドールの剣は、ガラスのケースの中で月光を受けて輝き、組分け帽子は机の後ろの棚に載っていた。

しかし、フォークスの止まり木は空っぽだった。

不死鳥は校庭に向かって嘆きの唄を歌い続けていた。

そして、 hogwarts の歴代の校長の肖像画に、新しい一枚が加わっていた——ダンブルドアが机を見下ろす金の額縁の中でまどろんでいる。

半月メガネを曲がった鼻に載せ、穏やかで和やかな表情だ。

その肖像画を一瞥した後、マクゴナガル先生は自分に活を入れるかのような、見慣れない動作をした。

それから机の向こう側に移動し、ハリーと向き合った。

くっきりと皺が刻まれた、張り詰めた顔だった。

「ハリー」先生が口を開いた。

「ダンブルドア先生と一緒に学校を離れて、今夜何をしていたのかを知りたいものです」

「お話しできません、先生」

ハリーが言った。聞かれることを予想し、答えを準備していた。

ここで、この部屋で、ダンブルドアは、ロン

fact, it looked almost exactly as it had done when he and Dumbledore had left it mere hours previously: the silver instruments whirring and puffing on their spindle-legged tables, Gryffindor's sword in its glass case gleaming in the moonlight, the Sorting Hat on a shelf behind the desk. But Fawkes's perch stood empty, he was still crying his lament to the grounds. And a new portrait had joined the ranks of the dead headmasters and headmistresses of Hogwarts: Dumbledore was slumbering in a golden frame over the desk, his half-moon spectacles perched upon his crooked nose, looking peaceful and untroubled.

After glancing once at this portrait, Professor McGonagall made an odd movement as though steeling herself, then rounded the desk to look at Harry, her face taut and lined.

“Harry,” she said, “I would like to know what you and Professor Dumbledore were doing this evening when you left the school.”

“I can't tell you that, Professor,” said Harry. He had expected the question and had his answer ready. It had been here, in this very room, that Dumbledore had told him that he was to confide the contents of their lessons to nobody but Ron and Hermione.

“Harry, it might be important,” said Professor McGonagall.

“It is,” said Harry, “very, but he didn't want me to tell anyone.”

Professor McGonagall glared at him. “Potter” — Harry registered the renewed use of his surname — “in the light of Professor Dumbledore's death, I think you must see that the situation has changed somewhat —”

“I don't think so,” said Harry, shrugging.

とハーマイオニー以外には、授業の内容を打ち明けるなとハリーに言ったのだ。

「ハリー、重要なことかもしれませんよ」マクゴナガル先生が言った。

「そうです」ハリーが答えた。

「とても重要です。でも、ダンブルドア先生は誰にも話すなとおっしゃいました」

マクゴナガル先生は、ハリーを睨みつけた。

「ポッター」呼び方が変わったことにハリーは気がついた。

「ダンブルドア校長がお亡くなりになったことで、事情が少し変わったことはわかるはずだと思いますがー」

「そうは思いません」ハリーは肩をすくめた。

「ダンブルドア先生は、自分が死んだら命令に従うのをやめろとはおっしゃいませんでした」

「しかしー」

「でも、魔法省が到着する前に、一つだけお知らせしておいたほうがよいと思います。マダム ロスメルタが『服従の呪文』をかけられています。マルフォイや『死喰い人』の手助けをしていました。だからネックレスや蜂蜜酒がー」

「ロスメルタ？」

マクゴナガル先生は信じられないという顔だった。

しかしそれ以上何も言わないうちに、扉をノックする音がして、スプラウト、フリットウィック、スラグホーン先生が、ゾロゾロと入ってきた。

そのあとから、ハグリッドが巨体を悲しみに震わせ、涙をぼろぼろ流しながら入ってきた。

「スネイプ！」

いちばんショックを受けた様子のスラグホーンが、青い額に汗を濡ませ、吐き捨てるように言った。

「スネイプ！わたしの教え子だ！あいつのことは知っているつち-だった！」

しかし、誰もそれに反応しないうちに、壁の高いところから、鋭い声がした。

短い黒い前髪を垂らした土気色の顔の魔法使いが、空の額縁に戻ってきたところだった。

“Professor Dumbledore never told me to stop following his orders if he died.”

“But —”

“There’s one thing you should know before the Ministry gets here, though. Madam Rosmerta’s under the Imperius Curse, she was helping Malfoy and the Death Eaters, that’s how the necklace and the poisoned mead —”

“Rosmerta?” said Professor McGonagall incredulously, but before she could go on, there was a knock on the door behind them and Professors Sprout, Flitwick, and Slughorn traipsed into the room, followed by Hagrid, who was still weeping copiously, his huge frame trembling with grief.

“Snape!” ejaculated Slughorn, who looked the most shaken, pale and sweating. “Snape! I taught him! I thought I knew him!”

But before any of them could respond to this, a sharp voice spoke from high on the wall: A sallow-faced wizard with a short black fringe had just walked back into his empty canvas.

“Minerva, the Minister will be here within seconds, he has just Disappeared from the Ministry.”

“Thank you, Everard,” said Professor McGonagall, and she turned quickly to her teachers.

“I want to talk about what happens to Hogwarts before he gets here,” she said quickly. “Personally, I am not convinced that the school should reopen next year. The death of the headmaster at the hands of one of our colleagues is a terrible stain upon Hogwarts’s history. It is horrible.”

「ミネルバ、魔法大臣は間もなく到着するだろう。大臣は魔法省から、いましがた『姿くらまし』した」

「ありがとう、エバラード」

マクゴナガル先生は礼を述べ、急いで寮監の先生方のほうを向いた。

「大臣が着く前に、hogwartsがどうなるかをお話ししておきたいのです」

マクゴナガル先生が早口に言った。

「私個人としては、来年度も学校を続けるべきかどうか、確信がありません。一人の教師の手にかかって校長が亡くなったのは、hogwartsの歴史にとって、とんでもない汚点です。恐ろしいことです」

「ダンブルドアは間違いなく、学校の存続をお望みだったろうと思います」スプラウト先生が言った。

「たった一人でも学びたい生徒がいれば、学校はその生徒のために存続すべきでしょう」

「しかし、こういうことのあとで、一人でも生徒が来るだろうか？」

スラグホーンが、シルクのハンカチを額の汗に押し当てながら言った。

「親が子どもを家に置いておきたいと望むだろうし、そういう親を責めることはできない。個人的には、hogwartsがほかと比べてより危険だとは思わんが、母親たちもそのように考えると期待できないでしょう。家族をそばにおきたいと願うでしょうな。自然なことだ」

「私も同感です」マクゴナガル先生が言った。

「それに、いずれにしても、ダンブルドアがhogwarts閉校という状況を一度も考えたことがないというのは、正しくありません。

『秘密の部屋』が再び開かれたとき、ダンブルドアは学校閉鎖を考えられました——それに、私にとっては、ダンブルドアが殺されたことのほうが、スリザリンの怪物が城の内奥に隠れ棲んでいることよりも、穏やかならざることです……」

「理事たちと相談しなくてはなりません」フリットウィック先生が小さなキーキー声で言った。

額に大きな青症ができていたが、スネイプの

“I am sure Dumbledore would have wanted the school to remain open,” said Professor Sprout. “I feel that if a single pupil wants to come, then the school ought to remain open for that pupil.”

“But will we have a single pupil after this?” said Slughorn, now dabbing his sweating brow with a silken handkerchief. “Parents will want to keep their children at home and I can’t say I blame them. Personally, I don’t think we’re in more danger at Hogwarts than we are anywhere else, but you can’t expect mothers to think like that. They’ll want to keep their families together, it’s only natural.”

“I agree,” said Professor McGonagall. “And in any case, it is not true to say that Dumbledore never envisaged a situation in which Hogwarts might close. When the Chamber of Secrets reopened he considered the closure of the school — and I must say that Professor Dumbledore’s murder is more disturbing to me than the idea of Slytherin’s monster living undetected in the bowels of the castle. ...”

“We must consult the governors,” said Professor Flitwick in his squeaky little voice; he had a large bruise on his forehead but seemed otherwise unscathed by his collapse in Snape’s office. “We must follow the established procedures. A decision should not be made hastily.”

“Hagrid, you haven’t said anything,” said Professor McGonagall. “What are your views, ought Hogwarts to remain open?”

Hagrid, who had been weeping silently into his large, spotted handkerchief throughout this conversation, now raised puffy red eyes and

部屋で倒れたときの傷は、それ以外にないようだった。

「定められた手続きに従わねばなりません。拙速に決定すべきことではありません」

「ハグリッド、何も言わないですね」マクゴナガル先生が言った。

「あなたは どう 思いますか。ホグワーツは 存続すべきですか？」

先生方のやり取りを、大きな水玉模様のハンカチを当てて泣きながら、黙って聞いていたハグリッドが、まっ赤に泣き腫らした目を上げて、シワガレ声で言った。

「俺には わかんねえです、先生……寮監と校長が決めるこってす……」

「ダンブルドア校長は、いつもあなたの意見を尊重しました」

マクゴナガル先生が優しく言った。

「私もそうです」

「そりゃ、俺はとどまります」

ハグリッドが言った。

大粒の涙が目の端からポロポロこぼれ続け、モジャモジャ髭に滴り落ちていた。

「俺の家です。十三歳のときから俺の家だったです。俺に教えてほしいっちゃんどもがいれば、俺は教える。だけんど……俺にはわからねえです……ダンブルドアのいねえホグワーツなんて……」

ハグリッドはゴクリと唾を飲み込み、またハンカチで顔を隠した。

みんなが黙り込んだ。

「わかりました」

マクゴナガル先生は窓から校庭をちらりと眺め、大臣がもうやってくるかどうかを確かめた。

「では、私はフィリウスと同意見です。理事会にかけるのが正当であり、そこで最終的な結論が出るでしょう」

「さて、学生を家に帰す件ですが……一刻も早いほうがよいという意見があります。必要とあらば、明日にもホグワーツ特急を手配できますー」

「ダンブルドアの葬儀はどうするんですか？」ハリーはついに口を出した。

「そうですね……」

マクゴナガル先生の声が震え、きびきびした

croaked, “I dunno, Professor ... that’s fer the Heads of House an’ the headmistress ter decide ...”

“Professor Dumbledore always valued your views,” said Professor McGonagall kindly, “and so do I.”

“Well, I’m stayin’,” said Hagrid, fat tears still leaking out of the corners of his eyes and trickling down into his tangled beard. “It’s me home, it’s bin me home since I was thirteen. An’ if there’s kids who wan’ me ter teach ’em, I’ll do it. But ... I dunno ... Hogwarts without Dumbledore ...” He gulped and disappeared behind his handkerchief once more, and there was silence.

“Very well,” said Professor McGonagall, glancing out of the window at the grounds, checking to see whether the Minister was yet approaching, “then I must agree with Filius that the right thing to do is to consult the governors, who will make the final decision.

“Now, as to getting students home ... there is an argument for doing it sooner rather than later. We could arrange for the Hogwarts Express to come tomorrow if necessary —”

“What about Dumbledore’s funeral?” said Harry, speaking at last.

“Well ...” said Professor McGonagall, losing a little of her briskness as her voice shook. “I — I know that it was Dumbledore’s wish to be laid to rest here, at Hogwarts —”

“Then that’s what’ll happen, isn’t it?” said Harry fiercely.

“If the Ministry thinks it appropriate,” said Professor McGonagall. “No other headmaster or headmistress has ever been —”

調子が少し翳った。

「私——私は、ダンブルドアが、このホグワーツに眠ることを望んでおられたのを知っています——」

「それなら、そうなりますね？」ハリーが激しく言った。

「魔法省がそれを適切だと考えるならです」マクゴナガル先生が言った。

「これまで、ほかのどの校長もそのようには——」

「ダンブルドアほどこの学校にお尽くしなされた校長は、ほかに誰もいねえ」

ハグリッドがうめくように言った。

「ホグワーツこそ、ダンブルドアの最後の安息の地になるべきです」フリットウィック先生が言った。

「そのとおり」スプラウト先生が言った。

「それなら」ハリーが言った。

「葬儀が終わるまでは、生徒を家に帰すべきではあくません。みんなもきっと——」

最後の言葉が喉に引っかかった。

しかし、スプラウト先生が引き取って続けた。

「お別れを言いたいでしょう」

「よくぞ言った」フリットウィック先生がキーキー言った。

「よくぞ言ってくれた！生徒たちは敬意を表すべきだ。それがふさわしい。家に帰す列車は、そのあとで手配できる」

「賛成」スプラウト先生が大声で言った。

「わたしも……まあ、そうですね……」

スラグホーンがかなり動揺した声で言った。

ハグリッドは、押し殺したすすり泣きのような声で賛成した。

「大臣が来ます」

校庭を見つめながら、突然マクゴナガル先生が言った。

「大臣は……どうやら代表団を引き連れています……」

「先生、もう行ってもいいですか？」ハリーがすぐさま聞いた。

今夜はルーファス スクリムジョールに会いたくもないし、質問されるのも嫌だった。

「よろしい」マクゴナガル先生が言った。

「それに、お急ぎなさい」

“No other headmaster or headmistress ever gave more to this school,” growled Hagrid.

“Hogwarts should be Dumbledore’s final resting place,” said Professor Flitwick.

“Absolutely,” said Professor Sprout.

“And in that case,” said Harry, “you shouldn’t send the students home until the funeral’s over. They’ll want to say —”

The last word caught in his throat, but Professor Sprout completed the sentence for him.

“Good-bye.”

“Well said,” squeaked Professor Flitwick. “Well said indeed! Our students should pay tribute, it is fitting. We can arrange transport home afterward.”

“Seconded,” barked Professor Sprout.

“I suppose ... yes ...” said Slughorn in a rather agitated voice, while Hagrid let out a strangled sob of assent.

“He’s coming,” said Professor McGonagall suddenly, gazing down into the grounds. “The Minister ... and by the looks of it, he’s brought a delegation ...”

“Can I leave, Professor?” said Harry at once.

He had no desire at all to see, or be interrogated by, Rufus Scrimgeour tonight.

“You may,” said Professor McGonagall. “And quickly.”

She strode toward the door and held it open for him. He sped down the spiral staircase and off along the deserted corridor; he had left his Invisibility Cloak at the top of the Astronomy Tower, but it did not matter; there was nobody

マクゴナガル先生はつつかと扉まで歩いて
行って、ハリーのために扉を開けた。
ハリーは急いで螺旋階段を下り、人気のない
廊下に出た。
天文台の塔の上に、『透明マント』を置きっ
ぱなしにしていたが、何の問題もなかった。
ハリーが通り過ぎるのを見ている人は、誰も
いない。
フィルチも、ミセス ノリスも、ビーブズさ
えもいなかった。
グリフィンボールに向かう通路に出るまで、
ハリーは誰にも出会わなかった。
「本当なの？」
ハリーが近づくと、「太った婦人」が小声で
聞いた。
「ほんとうにそうなの？ ダンブルドアがー
死んだって？」
「本当だ」ハリーが言った。
「太った婦人」は声を上げて泣き、合言葉を
待たずに人口を開けてハリーを通した。
ハリーが思ったとおり、談話室は人で一杯だ
った。ハリーが肖像画の穴を登って入ってい
くと、部屋中がしんとなった。
近くに座っているグループの中に、ディーン
とシェーマスがいるのが見えた。
寝室には誰もいないか、またはそれに近い状
態に違いない。
ハリーは誰とも口をきかず、誰とも目を合わ
さずにまっすぐ談話室を横切って、男子寮へ
のドアを通り寝室に行った。
期待どおり、ロンがハリーを待っていた。
服を着たままでベッドに腰掛けていた。
ハリーも自分の四本柱のベッドに掛け、しば
らくは、ただ互いに見つめ合うだけだった。
「学校の閉鎖のことを話しているんだ」ハリ
ーが言った。
「ルービンがそうだろうって言ってた」ロン
が言った。
しばらく沈黙が続いた。
「それで？」
家具が聞き耳を立てているとでも思ったの
か、ロンが声をひそめて聞いた。
「見つけたのか。……手に入れたのか？ あれ
をー分霊箱を？」
ハリーは首を横に握った。

in the corridors to see him pass, not even Filch, Mrs. Norris, or Peeves. He did not meet another soul until he turned into the passage leading to the Gryffindor common room.

“Is it true?” whispered the Fat Lady as he approached her. “It is really true? Dumbledore — dead?”

“Yes,” said Harry.

She let out a wail and, without waiting for the password, swung forward to admit him.

As Harry had suspected it would be, the common room was jam-packed. The room fell silent as he climbed through the portrait hole. He saw Dean and Seamus sitting in a group nearby: This meant that the dormitory must be empty, or nearly so. Without speaking to anybody, without making eye contact at all, Harry walked straight across the room and through the door to the boys’ dormitories.

As he had hoped, Ron was waiting for him, still fully dressed, sitting on his bed. Harry sat down on his own four-poster and for a moment, they simply stared at each other.

“They’re talking about closing the school,” said Harry.

“Lupin said they would,” said Ron.

There was a pause.

“So?” said Ron in a very low voice, as though he thought the furniture might be listening in. “Did you find one? Did you get it? A — a Horcrux?”

Harry shook his head. All that had taken place around that black lake seemed like an old nightmare now; had it really happened, and only hours ago?

“You didn’t get it?” said Ron, looking

黒い湖で起こったすべてのことが、いまでは昔の悪夢のように思われた。本当に起こったことだろうか？ ほんの数時間前に？

「手に入れなかった？」 ロンはがっくりしたように言った。

「そこにはなかったのか？」

「いや」 ハリーが言った。

「誰かに盗られたあとで、代わりに偽物が置いてあった」

「もう盗られてた？」

ハリーは、黙って偽物のロケターをポケットから取り出し、開いてロンに渡した。

詳しい話はあとでいい……今夜はどうでもいいことだ……最後の結末以外は。

意味のない冒険の未、ダンブルドアの生命が果てたこと以外は……。

「R A B」 ロンが呟いた。「でも、誰なんだ？」

「さあ」 ハリーは服を着たままベッドに横になり、ぼんやりと上を見つめた。R A Bには、何の興味も感じなかった。

何に対しても、二度と再び興味など感じることはないのかもしれない。

横たわっていると、突然、校庭が静かなのに気がついた。

フォークスが歌うのをやめていた。

なぜそう思ったのかはわからなかったが、ハリーは不死鳥が去ってしまったことを悟った。

永久にホグワーツから去ってしまったのだ。ダンブルドアが学校を去り、この世を去ったと同じように……ハリーから去ってしまったと同じように。

crestfallen. “It wasn’t there?”

“No,” said Harry. “Someone had already taken it and left a fake in its place.”

“Already *taken* — ?”

Wordlessly, Harry pulled the fake locket from his pocket, opened it, and passed it to Ron. The full story could wait. ... It did not matter tonight ... nothing mattered except the end, the end of their pointless adventure, the end of Dumbledore’s life. ...

“R.A.B.,” whispered Ron, “but who was that?”

“Dunno,” said Harry, lying back on his bed fully clothed and staring blankly upwards. He felt no curiosity at all about R.A.B.: He doubted that he would ever feel curious again. As he lay there, he became aware suddenly that the grounds were silent. Fawkes had stopped singing.

And he knew, without knowing how he knew it, that the phoenix had gone, had left Hogwarts for good, just as Dumbledore had left the school, had left the world ... had left Harry.